2021 年第 4 回都市環境デザインセミナー

テーマ　**関西の、地域に生きる伝統的祭りとその空間**

日時　2021 年 4 月 27 日（火）18：30～20：30
場所　ZOOM 会議（定員 50 名）

＜趣旨＞
日本の各地に存在する祭りは、日本の生活空間の特徴であり、魅力でもあります。昔から存続しているように思われている祭りは、実は変化を繰り返し、新しく生まれたりもしています。つまりその分、デザインの可能性があるということです。
今回は関西の沿岸地域における伝統的祭りを概観し、その特徴と可能性を考えたいと思います。

世話人　岡絵理子

＊解題と問題提起（鳴海邦碩）
＜日本都市の魅力としての祭り＞
海外からの留学生にとって日本の祭りは驚きの一つである。留学生の目を通して、日本の祭りの魅力を示してみたい。

＊話題提供　（大平和弘）
＜播磨灘・大阪湾沿岸域における伝統的祭りの空間について＞
～関西圏の広域的な特徴とコミュニティ形成からみたオープンスペースの可能性に着目して

＊質疑応答　（視聴参加者）

鳴海邦碩（なるみ・くにひろ）
大阪大学名誉教授。。日本都市計画学会元会長。大阪をはじめ関西の各地のまちづくりを支援。インドネシアをはじめアジア諸国の都市環境調査を行なってきた。サントリー学芸賞、不動産協会賞等を受賞。著書に、『都市の自由空間』『都市の魅力アップ』『失われた風景を求めて』他多数。

大平和弘（おおひら・かずひろ）
1985 年生まれ。兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師、兵庫県立人と自然の博物館研究員。博士（緑地環境科学）。日本造園学会、環境情報科学センター、日本都市計画学会、農村計画学会、日本遺跡学会等に所属。地域資源を活かしたまちづくりに関する研究や、文化遺産の継承に向けた景観計画に関する研究を行っている。

解題と問題提起：＜日本都市の魅力としての祭り＞

鳴海 邦碩

はじめに　さまざまな祭りがある

今日のテーマとして『日本都市の魅力としての祭り』ということで、私のほうからプログラムの狙いをお話ししたいと思います。

図１に示すように、日本にはさまざまな祭りがあります。祭りの原点というのは農耕、特に稲作にまつわる祭り、それから他方で、自然災害や病気、悪霊などを避けるための祭りで、本当は今のコロナに対しても、なんかお祭りでもやらんといけないような、そんな感じです。

古くから多くの祭りが行われてきましたけれども、その間、何度も変化したと思います。近代に入ると、明治の廃仏毀釈によって、京都では五山の送り火とか地蔵盆とか盆踊りが禁止されたといわれます。地方都市ではもっと大きな影響があったのではないでしょうか。

それから終戦の影響も大きかったのではないでしょうか。アメリカ的な社会になるからという理由で廃止されたり、あるいは新しい時代にふさわしい祭りをつくろうということもあったと思います。

現在の日本は、本当に祭りが盛んで、外国人旅行者にも人気があります。いつの時代もそうだったのかもしれませんが、今は祭りの時代だといっても過言ではありません。

しかし、過疎化や人口減少、高齢化などによって、祭りを持続することが難しくなっている例も少なくありません。既に無くなった祭りも多いと思います。

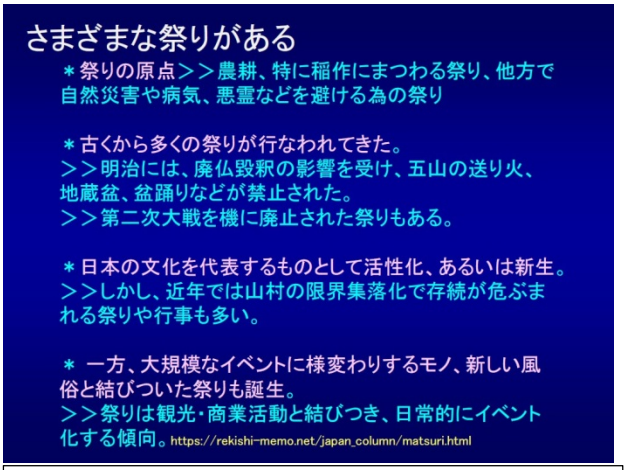


図１　さまざまな祭り

図２　子供たちの「太刀踊り」

祭りの多様なマネジメント

地域で祭りを支える

小さな町の祭りには、周囲の人びとによって守られるものもあります。高知県仁淀川町別枝(べっし)地区の秋葉まつりはその一つで、近年は１万人近い観光客が訪れるといわれます。

メインのイベントは子供たちの「太刀踊り」など奉納ですが、この地区の人口はわずか 150 人余り、子どもは一人もいないのだそうです。過疎と高齢化が著しく進んだ地域の伝統の祭りを守るために、祭り時に出身者が帰省したり、周辺の町の人びとが参加して、祭りが行なわれているそうです。主人公の子供たちも周辺の学校の生徒だそうです。祭りが地域を支え、祭りを中心とした新たなコミュニティが生まれている点が評価されて、平成 22 年度にサントリー地域文化賞を受賞しました。

大規模祭りのマネジメント問題

青森県の今別町の荒馬まつりも小さな町の祭りですが、人気があり、いくつかの大学の同好会が支えているそうです。

そんな周りから支えられている祭りがある一方で、大規模で観客動員力のある祭りもあります。そ

の筆頭格が徳島の阿波踊りで観光客が 120 万人超だと言われます。この祭りの運営費に補助金が投入されていても大赤字だと、一時話題になりました。

毎年 130 万人以上が訪れる大阪の天満宮の天神祭が、警備費の増加や協賛企業の減少で深刻な運営難に直面していると問題化しています。大きな祭りは大きな祭りで、課題を抱えています。

観光産業化の展開

日本の祭りには外国からの観光客にも人気があります。大阪の天神祭で警備等に経費がこれまで以上にかかるようになったのは、祭りの見方を知らない大勢の人がやってくるからだ、ともいわれます。インバウンドが運営を難しくしている面があります。

外国人にとっても祭りは魅力だ。そこで参加してもらってもっと盛り立てようということになります。一昨年、2019 年、国土交通省の観光庁が、祭りに外国の人も参加させようということで、ガイドブック作成の調査をしました（図３）。青森のネプタが推奨例として挙げられていました。

オマツリジャパン

祭りはイベントですから、祭りを主に事業対象にするビジネスが生まれることは容易に想像できます。最近ネットでいろいろ調べていると、オマツリジャパンというユニークな会社をみつけました。コロナ禍で中止になったわがふるさと弘前でも、中止を補うイベントを請け負っていました。

自分たちがスタッフとして、あるいは手足になって祭りをやるのかと思ったら、そうではなく、祭りに関心のある人たちを組織化する、そのような方法論なので、展開が面白いと思います。

祭り自分史

ふるさとの祭り

まちづくりのなかで祭りを考えるに当たって、どんな捉え方がいいでしょうか。そこで自分の祭り史から考えてみることにしました。

図５に示しているのは、青森県の津軽お祭りの写真です。上の２枚はお山参詣で、下の２枚はネプタ祭りです。青森では「ねぶた祭り」といいますが、それ以外はだいたい「ネプタ」です。

下の左は弘前高校の高校祭の「ネプタ」です。秋に高校祭があって、その年の３年生が「ネプタ」を

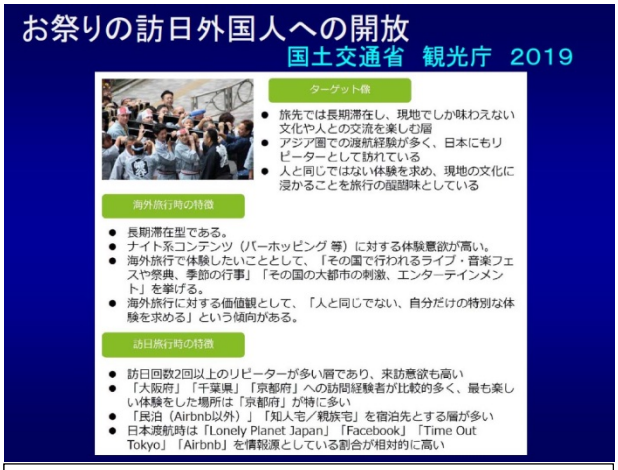


図３　祭りへの外国人の参加

図４　オマツリジャパン

図５　ふるさとの祭り自分史

出すのが伝統です。全部、生徒の手作りです。多分、真ん中のネプタが僕らのクラスのものです。

大都市に出てからの祭り

京都の大学に進学し、大学院も行きましたが、兵庫県庁に就職しました。地方から近畿のような大都市地域にやってくると住宅が大変で、当時の兵庫県

庁は、若手公務員のための住宅優遇措置をしていました。県営住宅の管理人をやると、県営住宅の入居資格を緩和してくれるというものでした。これに応募し、新しい団地の一つの棟を担当する管理人になったのです。

12 棟で各棟一人の管理人、中には警察官や芦屋市職員もいました。当時、神戸では学校以外の各地区でも運動会をやっており、わが団地でも運動会をやることにしました。団地の通路を走ったのです。企画から実施まで、管理人ががんばりました。図６の左下は盆踊です。隣棟空地の藤棚を利用してやりました。こうして振り返ってみると、団地の住民は祭りをたっしゃにこなしますね。

図７は、今住んでいるマンション団地の祭りです。子ども向けに自治体がやりはじめましたが、今は、高齢者も楽しんでいます。左下は近くの神社の秋祭りです。昔は旧集落の神社でしたが、今は団地などで人口が増加し、神社も神輿も立派になりました。

市街地の拡大と祭り

都市を理解する時に、人口増と市街地拡大の双方からみる必要があるということで、いつも使うのが図８のグラフです。

日本のこれまでを 3 段階で考える。明治の初めぐらい日本の人口が 4000 万でした。それから 1940 年ぐらいに8000 万になり、それから 1980 年に 1 億 2000 万になります。4000 万、4000 万、4000 万と増えてきたと理解するわけです。最初の 4000 万は幕末、明治ですから、伝統的な環境の町や村に 4000 万人が住めたわけです。それから戦争が終わる前までに 4000 万人増えました。これは日本の近代化を支えた町で、伝統的な町が拡大したり、いろんな工業の町が新たにできたりして、4000 万人が暮らせる町ができました。そして、戦後になって 1980 年ごろまでに 4000 万人増えました。この 4000 万人を受け入れたのが住宅団地だといっていいと思います。

以前、市街地の拡大プロセス、その核になっている古い村の変容に着目して研究したのですが、神社やお寺の立地、伝統的な祭りの分布が関係していることがわかったのです。つまり、市街地形成の核になっている伝統的な町や村には、大体、神社とかお寺があって、必ず祭りがあるわけです。

この調査研究を踏まえて、日本人と伝統的な祭りの関係、担うとか見るとか、まったく関係ないとか、を推測してみました。

図６　県営住宅団地の運動会、盆踊

図７　マンション団地の祭り、地域神社の祭り

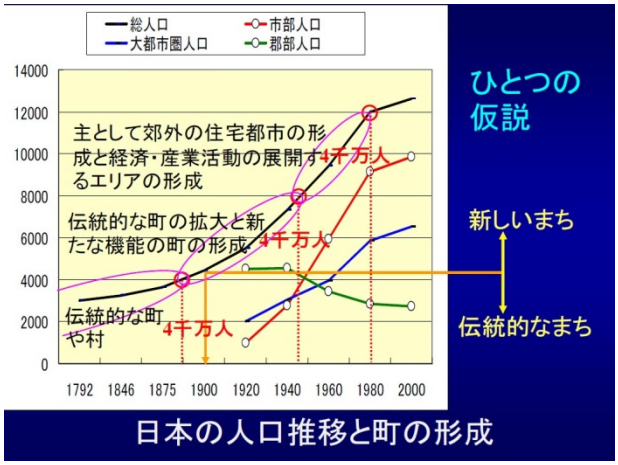


図８　日本の人口増・市街地拡大の３段階

先にみた第 3 期の 4000 万人の増加人口の居住地の多くは、郊外に開発された新しい市街地や団地だったといいましたが、その大半が大都市圏で開発されています。

こうした日本都市の市街化過程と伝統的な祭りはどのような関係にあるのだろうか。少し単純化し過ぎるかもしれませんが、第１期の 4000 万人が居

住する町や村には伝統的な祭りがあり、その後、これらの町や村の周囲に形成された市街地に居住する人たち、第２期の半数として、2000 万人は伝統的な祭りに巻き込まれる可能性があります。あわせて 6000 万人です。

日本の人口の後の半分、それは新しい機能をもった町や郊外の団地、ニュータウンに居住すると想定されるわけですが、これは伝統的な祭りに巻き込まれていないということになります。しかし、そうした人たちもまた、新しい祭りを自らの工夫で作るとか、あるいは私のように故郷や他の地域の伝統的な祭りと関係を結ぶ可能性をもっています。

もちろん、団地などでも、古い集落とどのような位置関係にあるかによって違ってきますが、あくまでおおざっぱな見方です。簡潔にいるならば、祭りの分布は、市街化の過程と重ねてみると、分かりやすいということです。

学生が親しんでいる祭り

日本人学生

先に述べた仮説を実証しようというわけではありませんが、非常勤講師で講義している大学院生に、２、３度アンケートをしたことがあります。質問は次の二つです。

A　あなたが親しんだ、あるいは親しんでいる身近なお祭り

B　ご両親などの関係で、あなたが親しんだ、あるいは親しんでいる伝統的なお祭り

A　では自分が住んでる所の祭りを、B では帰省する自分の実家の祭り、あるいは親が帰省するところの祭りを聞こうとしています。

図９は、2018 年度の結果で、伝統的な祭りから、団地の祭りまで、さまざま祭りがあがっています。実家の祭りも混じっているようですが、学生の出身地の多様性がわかります。

図 10 では B の祭りを聞いた結果です。これは伝統的なほとんどですね。＜無し＞は両親が親しんだ祭りがないことを意味しており、祭りと関係のない家庭がかなりあることがわかります。こうした調査をもう少し詳しくやると、日本の祭りの将来が見えてくるかもしれません。

留学生

なかは留学生もいまして、例えば台湾の留学生、別の年度の調査ですが図 11 のようなお祭りを紹介

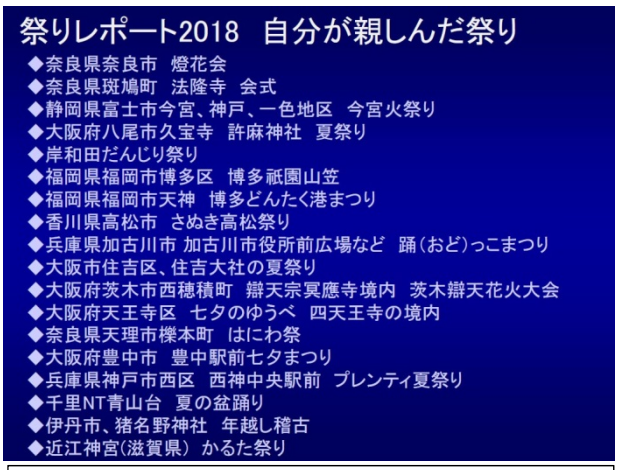


図９　自分が親しんだ祭り

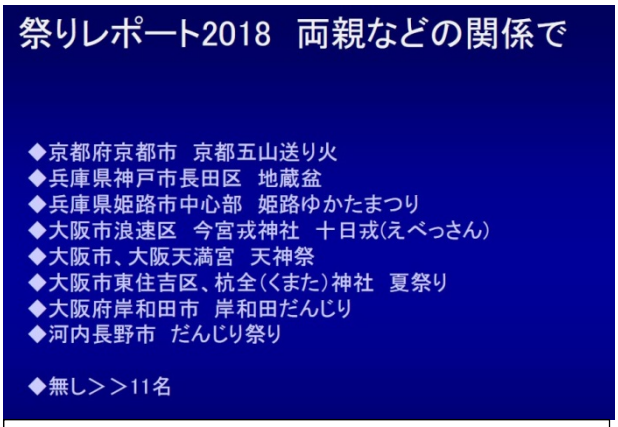


図 10　両親などの関係で親しんだ祭り

図 11　台湾の留学生があげた祭り

図 12　紫禁城の南東の天壇に対して、地壇は北東にある。春節文化廟会はここで行われる。

してくれました。図 12、13、14 は中国の留学生が挙げたものです。

中国では、社会主義革命を経たため、近代的な人民の祝祭がある一方で、春節や清明節など、古くからの習わしが残っています。今回は韓国の事例がありませんでしたが、韓国では長く強い身分社会が続いたために伝統的な民衆の祭りがないといわれています。

中国の留学生の一人が、日本の盆踊が好きで、次のような説明がありました。

「日本に来て、お祭りに参加してみようと思い、東京の巣鴨で盆踊りを見つけました。少し難しい踊りですが、日本人たちは子供の時から知っているようです。一番うれしいのは知らない人と目にあっても、いい気持ちを伝えるように感じました。場を楽しむ。これこそ祭りの魅力と思います」。

中国の祭りとの違いが感じられます。

図 13　清明節　年に１度先祖のお墓にお参りする

図 14　冬期、公園などに氷彫刻や氷の建造物が展示されライトアップされる。河川沿いの高層建築がひかりで装飾される。

伝えたいふるさとの景観

阪神・淡路大震災の時ですが、復興が進み出すと、昔の景観が変化して、どんどん無くなっていくという意見が出されるようになってきました。そこで、兵庫県が、「震災をのりこえ、県民が選んだ　伝えたいふるさとの景観」を募集することにしたのです。

図 15　兵庫県、沼島の祭り

1999 年に、当時の被災 10 市 10 町に対して行いました。1400 ほどの応募があったと記憶しています。

淡路島からも多くの応募がありました。図 15 が沼島の伝統の祭りで、今日のテーマにうまくあったイメージです。図 16 がその他の例を示していまず。左上から右へ、三原町人形まつり、淡路人形浄瑠璃フェスティバル、上田八幡神社の夏まつり、福良中之町の大綱引き・綱あわせ、五色町下堺のふるさと里帰り提灯、薬王寺境内の大鏡餅運び競争です。な

図 16　兵庫県、淡路島のまつり

かでも「ふるさと里帰り提灯」は出身者が帰省した時に提灯を飾るもので、面白い行事だと思います。

新しくつくられた伝統的な祭り

2002年ですから、もう20年ほど前のことですが、大都市周辺の祭りの調査をやったことがあります。その時の一例として、大阪市の平野区、六反、赤坂神社の祭りを調べました。地域は古い集落を核にして、周囲に戸建て住宅地や公営住宅の団地が建設されています。つまり、古い村がありその周りに戦後住宅開発が進んだ、そのような地域です。

村のあるお屋敷に神社があり、それを地域の神社にしたという経緯があります。以前は祭りが無かったのですが、新たに祭りを作ったのだそうです。

1978年に確か芦屋だったと思うんですが、芦屋の中古のだんじりが奈良の方に売られるらしいということを聞きつけて、地区で買い取ったということです。新品だと数千万するだんじりを250万で買ったそうです。

祭りをやるといっても、一からやらなければならない。総出で勉強したそうです。他の祭りにテープレコーダーを持っていってお囃子を録音し、それを聞きながら練習したそうです。

祭りの地域の住民は3つに分けられます。幼年組、成年組、年寄組です。幼年組は小中校生で空色のはっぴをきます。黒いはっぴは高校生以上、この黒いはっぴが祭りの主役です。そして年寄組も空色のはっぴで、祭りを支えます（図17、18）。

調査した時は、20年ぐらい経った時で、若い祭りだという感じは全くしませんでした。それから20年経った今、どんな祭りになっているでしょうか。

先ほど阪神・淡路大震災の話をしましたが、震災を乗り越えた祭りもあります。図19の淡路島の育波神社の布団太鼓です。集落は地震で大きな被害を受けましたが、立派に復興しました。実は調査に行った2013年の4月にもかなり大きな地震がありました。

災害を乗り越える祭り

今回のコロナ禍で多くの祭りが中止になっていると思います。私のふるさと、弘前の「ネプタ祭り」も去年は中止でした。「ネプタ」は元来、「眠り流し」で、夏の疫病に打ち勝つために起きたものですから、コロナに打ち勝つためには本当は祭りを中止してはいけないのかもしれません。

図17　大阪市平野区　赤坂神社の祭り

図18　集うことで愛着が生れる

図19　育波神社の布団太鼓　2013年撮影

全市をあげた正式な「ネプタ祭り」は中止になりましたが、地元の責任で運行した町もあったようです。もともと、１台１台の「ネプタ」は町内会がだすのです。各町のネプタ責任者が集まった協議会では次のような発言がありました。

「このような年のねぷたの痕跡を残すべきだと

思います。～～～新型コロナウイルスの年でもねぷたをやったなぁという記憶は、老若男女に鮮烈に残ると思います」。

今日のねらい

関西はいくつもの都を育んだ地域で、歴史もあり、海から平野へ、そして山へと続く地形的な条件を持っています。今回はこの地域、具体的には、関西沿岸地域、西赤穂から大阪湾ぐるりと、南は阪南市ぐらいまでの沿岸地域を対象としています。

この地域には、たくさんの祭り、多様な祭りがあります。そうした祭りが、どのような特徴を持っているのかを明らかにした上で、地域において果たしてきた役割を考えてみたいと思います。

都市とか地域において、どのような役割を果たしてきたのか、あるいは、コミュニティ形成上どんな役割を果たしたとか。長い歴史の中での浮沈があって、今日の祭りがあると思います。そのことがこの地域の文化的な歴史の一つの側面だと思います。地域性、地域の個性を継承していくためにもこのような検証作業は必要だと思います。

大平和弘さんは３０歳代の半ばですが、地域資源を活かしたまちづくりに関する研究や、文化遺産の継承に向けた景観計画に関する研究を行っています。今日は、大平さんに話題を提供していただいて、その後に、意見交換をしたいと思います。

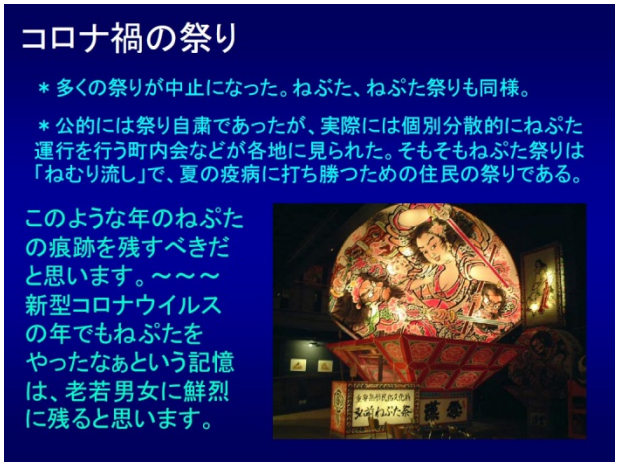


図 20　コロナ禍の弘前のネプタ

播磨灘・大阪湾沿岸域における伝統的な祭りの空間の可能性

兵庫県立大学　講師
兵庫県立人と自然の博物館　研究員
大平　和弘

１．はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）の蔓延により、私たちの暮らし方が大きく変わりました。通勤の満員電車や都心の人ごみは避けるべき不必要な「密」かもしれませんが、肌がぶつかり合う裸祭りや酒を酌み交わす直会（なおらい）など、地域にとって大切な「密」の機会もすべて中止となってしまいました。地域の伝統的な事物が消失、改変する危機に瀕しているのではないでしょうか。一方で、伝統的な事物は､その土地にしかない地域固有の魅力として、地域のアイデンティティ形成、地域コミュニティの再構築につながる可能性を有しています。いまこそ地域の伝統的な祭りの可能性について考えてみたいと思います。

私が調査に出かける兵庫県内でも、日本の原風景ともいうべき、人と自然が織りなす伝統的な祭りの風景がみられます。例えば、宍粟市の御形神社の春祭り（写真 1）は、かつて農村集落でどこでも見られたような祭りの風景です｡ここで着目したいのが、祭りが続く限り「神輿を担ぐ」という行為自体は時代が変わっても何らかの形で残っていくものと考えられますが、周辺が耕作放棄されたり、周辺土地利用が変化した場合、村はずれの御旅所まで村人と神が往来しながら春めく里山を愛でる伝統的な祭りの姿は消失してしまうでしょう｡｢祭りが継承されても、その周囲の風景も残されないと祭りの本質的な意味や価値が損なわれてしまうのではないか｣、「祭りが執り行われるシンボル的な地域の空間は、祭りに不可欠な舞台装置なのではないか」というのが私の問題定義です。この祭りに不可欠な空間を「文化的空間」と定義し、沿岸域の伝統的な祭りの文化的空間にどのような可能性があるか調べてみました。

写真１　春めく里山を愛でながら村を巡行する御形神社の春祭り

２．文化的空間とは

「文化的空間」という言葉は、国内でほとんど耳にしませんが、世界的にみるとユネスコの無形文化遺産保護条約（2003）において「無形文化遺産」の 1 つのジャンルです。この条約の中で「祭祀や芸能を行う上で不可欠な空間」が「文化的空間」と定義され、保護すべき対象として明記されています。しかしながら、わが国では、文化財のジャンルに「文化的空間」という考え方は未だ存在していません。地域のある土地領域に土着の思想や歴史的背景への認識などの無形要素が付加される形で形成される文化的空間は、必ずしも明瞭な土地境界を持たないことも多く、土地を指定して保護を講じるわが国の現行法になじまない考え方なのではないかと思われます。しかし、近年「文化多様性」や少数民族・先住民族の権利などが国際社会のキーワードになっていることから、わが国においても、アイヌ民族の熊送りの儀式空間の再生・整備がなされるなど、文化的空間保護への社会的要求が高まってきている状況といえそうです。これから研究・議論を深めていくべき考え方ではないかと考えています。

３．祭りの文化的空間から捉えた文化圏

伝統的な祭りの文化的空間を､｢地域で大切にされる屋外空間｣と考えたとき、その分布傾向から関西の新たな文化圏がみえてくるのではないか。そのようなマクロな視点で関西の沿岸域の伝統的な祭りの文化的空間に着目しました。

「伝統的な祭り」と一口に言っても、リスト化されたものは存在しません。今回は、播磨灘・大阪湾に面している市町と、兵庫県についてはその隣接した市町（計 34 市町）が無形民俗文化財として指定あるいは選択している祭りや神事・行事（計 148 件、うち兵庫県 87 件･大阪府 46 件)を対象にしました。この 148 件の祭りを概観すると、15 種類（多いもの順に、獅子舞：21 件、盆踊り 16 件、鬼追い：13 件、舞：11 件、屋台巡行：11 件、行列：10 件、念仏：

表１　播磨灘・大阪湾沿岸の伝統的祭りの文化的空間のタイプ

文化的空間タイプ		代表例	件数
A. 神社境内タイプ	神社境内あるいは社殿内で完結するもの	獅子舞、厄除・参詣	54
B. 寺境内タイプ	寺境内あるいは本堂など建物内で完結するもの	鬼追い、念仏	34
C. 神社巡行タイプ	神社境内に加え、御旅所などを巡行するもの	屋台巡行、だんじり	27
D. 広場タイプ	公園・小学校グランドなどで展開されるもの	盆踊り	14
E. 街路タイプ	集落内の街路や畦道などで展開されるもの	行列	6
F. 水辺タイプ	海上・川上・港などで展開されるもの	船渡御	6

10 件、だんじり：8 件、厄除・参詣：7 件、船渡御：5 件、田植え：5 件、火祭り：4 件、弓：4 件、神輿渡御：3 件、その他(唄・儀式など)：20 件）となりました。この中から場所が特定されない唄など 7 件を除いた 141 件のデータをもとに、その祭りがどういった場所で執り行われているのかを、市町の文化財の紹介文などから特定し、文化的空間の分類を試みてみました。その結果、表 1 のように、A～F の 6 つのタイプに分かれることが分かってきました。当たり前かもしれませんが、祭りの種類と空間タイプは関係がみられます。例えば、最も多いタイプは獅子舞など神社の境内で完結している「A.神社境内タイプ」､続いて鬼の面をかぶって厄払いをする鬼追いや修正会といわれる寺の境内や本堂だけで行われる「B.寺境内タイプ」となります。次いで、屋台やだんじりなどが神社境内に加えてまち中を練り歩く「C.神社巡行タイプ」が多く、公園や小学校グラウンドで執り行われる「D.広場タイプ」､村の中で行列する「E.街路タイプ」､水辺で船渡御などが行われる「F.水辺タイプ」は少数でした。寺の祭りにまち中を練り歩く祭りがないのは不思議です。関西の沿岸域では、文化財指定のものに限りますが、神社境内を核とする祭りが非常に多いということが分かります。一方で、神社や寺を核としない、広場や街路などまちの中のオープンスペースだけで展開されるものも少数あることは大変興味深いです。

これらを文化的空間タイプ別に地図上に示すと、図 1 のようになります。薄目をしてみますと、やや地域的な偏りが認められるように思います。文化的空間、即ちどんな屋外空間を自分たちの文化のシンボルとして捉えているのか、ということから、地域性、文化圏が見えてきたような気がします。細かく

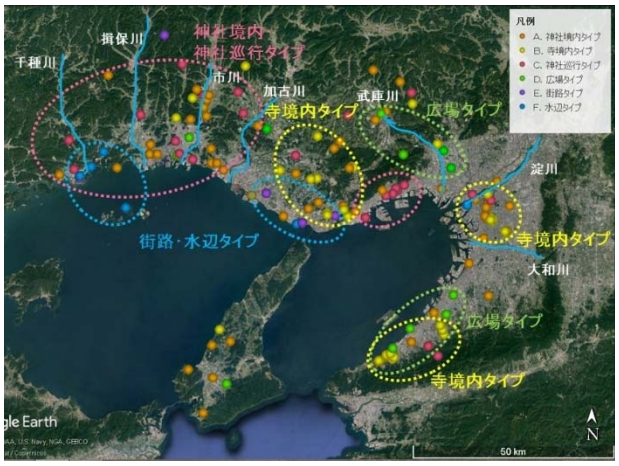


図１　祭りの文化的空間から捉えた文化圏

みると、どうも流域や地形的なまとまりが関係するように思います。例えば、兵庫県赤穂市～たつの市～姫路市～加西市では、千種川や市川、揖保川流域に沿って、赤の「A.神社境内タイプ」オレンジの「C.神社巡行タイプ」の分布が多くみられます。これらは播州屋台と呼ばれる大きな神輿がまちを練り歩いたり、播州獅子が神社境内やまちの中の御旅所で展開される祭りが特徴的なエリアです。また、神戸市東灘区～兵庫区では､だんじりが街路を巡行する「A.神社境内タイプ」がみられます。祭りの由来は諸説ありますが、文化圏として捉えると、もともと六甲の御影石の石材を運ぶ重いものを引き摺る技術などもだんじりの普及に影響してるのではないかと推察できたりします。

一方、黄色で示す「B.寺境内タイプ」は、三木市～神戸市西区･垂水区･須磨区に多くなっています。こちらはお寺の中で鬼の面をつけた人々が厄払いを行う、鬼追いの儀式が中心です。同じく大阪市北区～天王寺区～平野区、貝塚市～阪南市にもまとまりがあります。大阪府北部は、厄除祈願のために寺に何度も参詣する都市部ならではの祭りの文化が成立しており、南部では念仏のために寺へ参る違いがありそうです。

また、青で示す「F.水辺タイプ」は船で神輿が渡御されるような祭りで、赤穂市～相生市、明石市～神戸市垂水区にわずかに見られ、海岸線が埋め立てされた姫路市域でぽっかり間が空いています。かつては姫路市沿岸にもあったのかもしれません。加えて同じような地域で、紫で示すため池周囲や畦道などを行列する「E.街路タイプ」が分布しており、これらのエリアは豊作や豊漁に関係した屋外空間を拠

り所とする同一の文化圏であったのではないかということが想像されます。

さらに、黄緑で示す「D.広場タイプ」は、兵庫の北摂地域、伊丹市～宝塚市～三田市にかけて、大阪南部の岸和田市～泉佐野市～阪南市にかけて分布がみられ、前者は武庫川流域に展開される摂津音頭を中心とした盆踊り、後者はくどきと呼ばれる唄や踊りの場として、公園や学校のグラウンドなどが活用されています。

このように文化的空間をマクロに捉えると、祭りによる文化圏を少し浮き彫りにできたのではないかと思います。

４．沿岸域の祭りの文化的空間の実態

今度はミクロな視点で、祭りの文化的空間の実態、とくに開発行為等により空間の改変や消失の可能性が高いと考えられる、水辺の文化的空間の実態に着目します。播磨灘と大阪湾に限ると事例が少ないため、瀬戸内海沿岸に拡張して調べてみました。

世界遺産などの遺産の場合、そのものがどの程度オリジナルの状態で保存されているのかを、真正性（オーセンティシティ）という考え方で評価することがあります。簡単に言えば、文化遺産の場合は歴史的・芸術的にみてどの程度「本物の状態」であるか、自然遺産の場合はどの程度「手つかずの自然」が残っているか、を意味します。今回の文化的空間の場合、「本物の状態」かどうかを、空間の土地利用、立地や空間の骨格、空間の基盤を構成する材質、空間に存在する構成要素の４つの条件から評価してみました。

その結果、図２で示すようにⅠ～Ⅳの４つのパターンで捉えることができました。まず１つ目は、最も真正性の高い「Ⅰ．空間保存型」です。例として、かつては大阪湾沿岸の各地でみられていた神輿が浜辺に降りて海水で禊を行う祭りですが、現在は大阪府阪南市の波太神社の秋祭り（図２②）にみることができます。周囲の消波ブロックなどの構成要素の変化はありますが、自然に堆積した砂浜が残されオリジナルの空間が維持されている事例です。また、兵庫県明石市のおしゃたか舟神事（図２③）は、おしゃたか舟を押して泳ぐ男たちが入水する港は、基盤がコンクリートに変化し港の構造物は大きく変化しましたが、空間の骨格が維持されています。

２つ目は、文化的空間が一度消失しましたがその後再生された「Ⅱ．空間再生型」です。例として、

変容パターン	行事名	所在地	真正性 土地利用	立地・骨格	基盤材質	構成要素
Ⅰ.空間保存型	①家島天神船渡御	兵庫県姫路市	○	○	○	○
	②波多神社秋祭り	大阪府阪南市	○	○	○	△
	③おしゃたか舟神事	兵庫県明石市	○	○	△	△
	④高砂神社船渡御	兵庫県高砂市	○	○	△	△
Ⅱ.空間再生型	⑤俄まつり	山口県柳井市	○	○	△	×
	⑥安城寺の川狩り	愛媛県松山市	○	△	×	△
Ⅲ.空間再生移転型	⑦由良湊神社夏越祓	兵庫県洲本市	○	×	○	△
	⑧安仁神社海中禊	岡山県岡山市	○	×	○	△
Ⅳ.空間消失型	⑨八幡神社走り神輿	岡山県笠岡市	×	○	×	△
	⑩茅渟神社秋祭り	大阪府泉南市	×	×	×	×

図２　沿岸域の祭りの事例にみる
文化的空間の変容パターン

愛媛県松山市の安城寺の川狩り（図 2⑥）では、一度河川の水質汚濁により、神輿が禊を行う行為が途絶えたのですが、禊専用の人工的なプールと桟敷席を兼ねた段差が川際に整備され禊が復活しました。まさに文化的空間が再生された事例です。

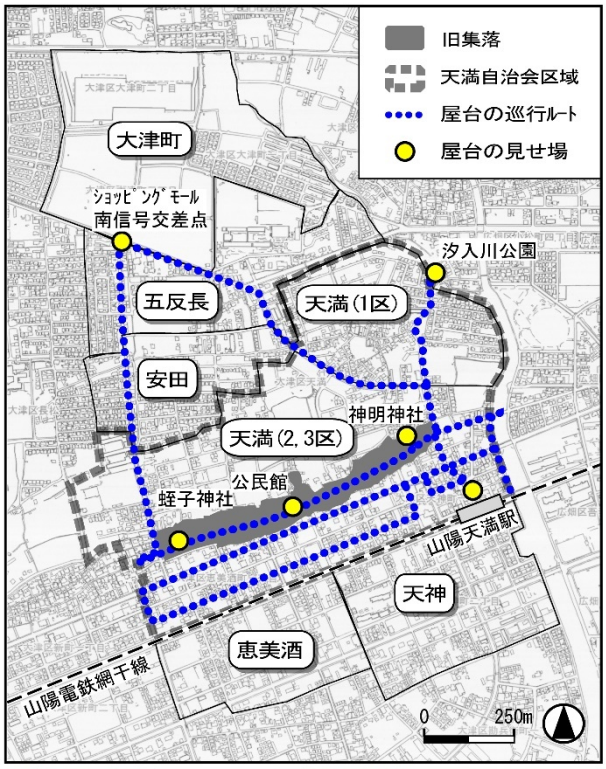
続いて 3 つ目は、文化的空間が消失した後、別の場所に再生された「Ⅲ．空間再生移転型」です。例として、兵庫県洲本市の由良湊神社の夏越祓（図 2⑦）では、港湾整備により砂浜が消失したのですが、その代償として別の場所に小規模な祭り専用の砂浜が養浜された珍しい事例です。本来砂浜が成立しない立地のため、砂の流出など維持管理上に多くの課題を有し、また空間の骨格などは変化していますが、祭りと海の関係をよく伝える空間となっています。

最後に空間が消失した「Ⅳ．空間消失型」です。大阪府泉南市の茅渟神社の秋祭り（図 2⑩）の御旅所は、もともと樽井の浜という砂浜があったのですが、現在は埋め立てにより消失しています。埋め立ての地先に樽井サザンビーチという砂浜が整備されたのですが、祭りはその浜へは行かず、かつての浜の場所である道路空間が祭りの見せ場となっています。砂浜を別の場所に再生した場合、海の生物多様性は再生されますが、文化の多様性は、一度途絶えてしまうと再生が非常に難しいといえるかもしれません。祭りの文化的空間が、地域の大事なオープンスペースとして維持・継承されることを願います。

５．文化的空間と地域コミュニティの関係

このような文化的空間は、地域コミュニティとどのような関係にあるのでしょう。兵庫県姫路市の魚吹八幡神社の秋季例祭の事例をみてみます。この祭りは、播州の中で一番規模の大きな祭りで、25 の自治会から大きな神輿の形をした屋台やだんじりが魚吹八幡神社へ宮入りをします。中でも由緒ある大津区天満地域（旧天満村）で調査を行いました。この村では高度経済成長期以降の非農家人口の増加に伴って、非農家の居住地区のある自治会をどんどん分立し、旧集落中心の天満自治会のごく一部の地縁者により、祭典委員会が組織され、昔ながらのしきたりを重んじた祭りの運営がなされています。

この祭りには、村練りと呼ばれる村中を 1 日練り歩く日があります。練り歩く途中には祭りの見せ場がいくつかあり、それぞれの見せ場は、文化的空間と呼べるのではないかと思います。屋台を追跡調査した結果、図 3 のように図示することができました。



ショッピングモール南信号交差点

山陽電鉄天満駅前広場

図 3　屋台の巡行ルートと新たに追加された文化的空間

青線の巡行ルートと黄色の○で示す屋台の見せ場をみると、旧集落を出た屋台は、安田・五反長地区の子供会の屋台との練り合わせが、新興住宅が建ち並ぶ大型ショッピングモール前の交差点で展開されます。また、夕方通勤客の多い山陽電鉄駅前広場が見せ場となるなど、伝統的な御旅所に加えて、現在の生活拠点も文化的空間となっていることが分かりました。対して、山陽電鉄の線路で隔たれた南部の天神・恵比寿地区には、文化的空間はみられません。

この天満地域で、祭りへの参加やコミュニティ意識を問うアンケートを地区別に行いました。その結果、旧集落の 7 割以上の人は祭りに参加していましたが、屋台が線路を越えない恵比寿・天神地区では、祭りに全く関わりのない人がほぼ半数となりました。しかし、交差点に見せ場のある大津町では、祭りに参加はしていないのですが観覧のみ行うという人が

7 割程度存在しました。また、コミュニティ意識との関係をみると、観覧のみの人は、全く祭りに関わりのない人に比べると、有意に地域への愛着度が高く、祭り以外の地域行事への参加も多いという結果が得られました。これらの結果から、伝統的な祭りの見せ場である文化的空間を、観覧者が多い現在の生活拠点と結びつけることで、地域のアイデンティティ形成や、コミュニティ意識の醸成に役立つ可能性があると考えられます。このように、まちの日常生活の中で、非日常時にだけ晴れの舞台となる隠れた文化的空間の存在も、今後まちづくりや地域の魅力づくりにおいて着目していくことが重要ではないかと思います。

６．おわりに

人口減少や地域分散型の社会構築が叫ばれる今日、まちの生活圏をどのように捉え直すかが問われています。駅前の利便性の高いエリアに都市機能が集約される一方、仮想空間も含んだ超広域的なネットワークによる経済活動や空飛ぶ車などの技術革新により、私たちの移動や距離、生活圏の概念が急速に変わろうとしています。伝統的な祭りやその文化的空間から捉えた、流域や地形的まとまりなどの文化圏が、私たちのまちの生活圏を捉え直す１つの手掛かりとなる可能性があります。一方、ウィズあるいはアフターコロナ社会において、星野リゾート社長が提唱する「マイクロツーリズム」という近場で楽しめる観光スタイルが着目されています。また、まち中では密にならない屋外空間活用の需要が高まっています。今後、祭りのための非日常な文化的空間が、日常の地域の魅力づくりや身近なまちの居場所づくりに活用されることを期待したいと思います。

以上

意見交換

【開始および発言　岡絵理子】お二人のご発表を伺い、ただいまから質疑応答や意見交換を行いたいと思います。私、岡が司会いたしますが、まず私のほうから質問させていただきます。

橿原市の大和八木の祭りの調査をしたことがあるのですが、流行り廃りがあり、1980 年ぐらいの人口がどっと増えたときに、みんな祭りに参加したくて町内で祀る祠の数がすごく増えるんです。田んぼだった所に人が住み、今までと少し違う祠の造り方をして、それで祭りをする町内が増えたんですが、今またどんどんなくなっていって、最終的には、その前からやってられた町だけに戻ってくのですが、他の村にもそういう傾向はみられますか。高度成長期とともに祭りが伸びて、その後またどんどん衰退していくっていうふうな状況が見られたんですけども、他の村はどのような傾向でしたでしょうか。

【回答　大平和弘】私の調査の中では、おっしゃっていただいたとおり、少し特徴的な文化財にもなるようなものをピックアップしてましたので、むしろ保存会をしっかりつくって、できるだけ他の人も参画できるような、近隣の高校生も呼んだりとか、そうい った形で何とか残そうとしてるような所をピックア ップして調査をしてましたので、その周辺の状況についてはちょっと把握はできておりませんけれども、関連してすごく参考になるというのか、面白いなと思っているのが、祭りも、この場所じゃないと意味がない祭りとか、それは神様もそうだと思うんですけども、例えば街角のどこに祭ってもいいような神様もあれば、この山の、この場所に安置すべき神様というのもあると思うんですね。だから祭りについても一緒で、その場所とセットで祭りを残さないといけない場合と、そうじゃないケースがあって、特に新しく高度成長期にできてきたような祭りというのは、場所とリンクしてるっていうのがすごく薄いんじゃないかなと思うんですよね。そういった意味では、場所を持ってるということはイコール、すごく普段からそこをよりどころとして接している。それは神社とかだと思うんですけども、そういったものがあるからこそ、信仰心あるいはそこを大事にしようということがあって、祭りもそういった空間を伴っている所が最後にも残ってもらえたら、個人的にはうれしいなと思っているんですが、その逆もあって、そういった空間を維持管理することも非常に困難な状況なので、そういった所もどんどん限界集落なんかは閉めてるというのもあるので、なかなかその空間が持っている両面性というんですかね。自分たちのよりどころにもなるオープンスペースとしての可能性もあるんだけれども、だけれども維持管理上、非常に難しいこの中を、祭り以外のいろんな機能とか、別のコミュニティーの機能とか、普段から違う活用をするとか、そんなふうな付加価値を付けて、その空間を守っていかないといけないのかな、そんなことをちょっと考えたりしました。

【発言　中村伸之】岡先生の話、非常にぴんときたんですけどね。つまり、新しい住民が新しい祭りをすると。しかし、それはいつか途絶えちゃうと。なぜか。神様がいないから。そこには神様がいなかったのね。祭りの形、イベントとしての面白さを継承しても、実はスピリチュアリティーというか、核となる精神性がないと、いつかはみんな飽きてしまうとかね。年取って継承者がいないってことになるでしょう。継承するっていうことはすごいことなんですよ。その核は何かというと、私はあんまり宗教的な人間じゃないんだけど、あえて言えば神様ですよね。それが土地と結び付いてると。それがその土地の強さ、文化の強さだとも思うんですよね。ぜひ今の研究にプラス神様という問題を加えていけば、奥深い研究になるんではないかという気がいたしました。どうも失礼しました。

【回答　大平和弘】ありがとうございます。今のお話で少し関連するかもしれないので。例えば私なんかは公園行政とか緑環境を扱ってる者なんですけども、どうしても宗教空間というのはそういった都市計画からはみ出してしまう。今までもそうであったというようなところで、もう一度そういう、いわゆる精神性を伴った緑っていうのもどういった方法で残していけるのかっていうのは、われわれ都市をやってる人間も考えていかないといけないなという、まさに今、ご指摘をいただいて感じました。

【発言　鍔隆弘】とっても興味深く聞かせていただきました。お祭りのために新たにオープンスペースをつくったもので優れた例はありますか。そうでないものをご紹介いただいたので、実はここがすごいんだよというのがあったら、ちょっと教えていただきたいなと思います。

どうもありがとうございました。お祭りや信仰にとってどうしても外せない地形というものもあるので、それを意識してオープンスペースつくった例があるかしらと思って尋ねました。どうもありがとうございました。

【回答　大平和弘】実は私もそれを狙っていろんな調査をしてきてるんですが、なかなか見つけられてないです。むしろ、ご存じの方がいらしたら、ぜひこういう所はすごいよと言っていただきたいぐらいなんですよね。特に私が扱ってるのは文化財にもなるような所ということで、できるだけ昔ながらのということで、そもそもが別の目的も兼ねた整備とか、そういったようなことを趣旨としてないような整備事例なんかもあるのかなと思ってまして、なかなかそれが分からないかなというところですけれども。あとは具体的事例は分からないんですけれども、例えばうちの当館の福本先生なんかもニュータウンと旧集落の祭りとの関係を見ておられて、旧集落のおみこしも、ニュータウンの広場のような所に、いわゆる上がってきて、そこも見せ場になってるようなケ　ースなんかもあるので、念入りに探していけば、そういったものが実際、見せ場になるためにちゃんとデザインされているような所もあるのかもしれないなと思ったりしています。どちらかというと、ニュ　ータウンとか新しく整備する過程のときにそういったものを考えられてるのかなというので、あまり私の対象としてる所で見つけられてないんです。

【発言　岡絵理子】私、今ちょっと思い出したんですよ。天神さんの祭り、川にみこしを下ろすときに、堤防側でクレーンでつり上げて下ろしてるんですけれどもね。なんだけど、北浜テラスっていうのをご存じですか。河川管理用地の上に板を出してというか、テラスを出して、京都の鴨川をまねしたような、床をまねしたようなものなんですけれども、あれの一番初めの発想が、昔、子どものときに天神さんの舟に対してお神酒を渡すのに、自分のうちの雁木の所から渡したっていう記憶を持ってるおじさんがおられて、その方がもう一度あれをやりたいと。川から天神さんの祭りを見たいっていうところから、あれ始まったんですね。実際にある年にテラスの所からはしごを下ろして、それで堤防の下の所に下りて、そこから手でお神酒を渡したっていうシーンを私も見たんですけれども、ああいうことをもう一度やりたいと思ったことが北浜テラスができたきっかけです。天神さんはもともとは川下の松島のほうに向かって御旅所があったので、船渡御をしてたんですけれども、地盤沈下で橋の下をくぐれなくなっちゃったので、今は上に上がっていってるんですね。福島のほうに上がっていって戻ってきてるんですけども、実はその前日に松島のほうに皆さんでバスに乗って行かれてて、御旅所まで行って、お参りをして帰ってくるっていうのをやっておられる。よく聞くと、いろんな形で再生をされてたり、守っておられたりする所があるんですけど、今、天神祭は花火と夜店の祭りやと思ってる学生がたくさんいますので、そんなところしか知らないけれども、本当は空間、いろいろ守っておられる所があるなというふうに思いますね。

【発言　鳴海邦碩】先ほどの中村さんの場所論というのは面白いし、きょうのテーマにも関係します。

今日話題に出した津軽のネプタ、青森のねぶたには神社などの特定の場所が関係していないのです。青森に限らず他のまちでも、道を流す祭りは、広場のような特定の場所が無い。道はもちろんありますが。道を流すのは、風流（華やかな衣装や仮装を身につけて、囃し物の伴奏で群舞する）の形態だと思います。それにファッションを強調すると「バサラ（婆娑羅）」になる。

道を流す祭りは、おはやしとか、歌とか踊りとかが基本に付随する。そういう性質があるから、ゲリラ的にどこでもできる。だから押さえ付けられない。場所がある祭りは押さえ付けられる。祭りにはいろいろありますが、ねぶたにはそういう性質があると気付きました。

太鼓と笛があればどこでもできる。場所がないというのも面白いなと、ちょっと今、中村さんの意見を聞いて想像を巡らせました。

【発言　岡絵理子】先生、ネプタはどこかで止まって何かするっていうことはしないんでしょうか？

【発言　鳴海邦碩】ネプタ、ねぶたがイベント、アトラクションになると、メーンのコース、観客席などが設定されますが、はじまりは町内の道を自由に移動することだったと思います。私は小さなころはそうでした。

交差点や橋、特に橋の上で出会うと、どっちが先かでけんかになったりする。戦前には、刀を腰に差して参加する者もいたそうです。

それはぶっそうですが、本当にネプタの好きな人は、お囃子が好きです。太鼓、笛、摺り鉦。この三つは津軽のいろいろな祭りに共通していて愛好者が多い。結婚して仙台に住んでいる私の姪は、ネプタの度に、鉦を鳴らしに帰ってくるそうです。

それからネプタが面白いのは、最終日、七日日に燃やして川に流します。そして来年はまた一から作るわけです。燃やして流す場所も、何か特定の意味があるわけではないようです。青森のねぶたはショーとして、海上運行をやっています。

ねぷたの原点は「ねむり流し」で、夏の疫病封じ、あるいは害虫駆除と関係があります。だから燃やして水に流すのだと思います。

【発言　井口勝文】　鳴海先生の場所がないという話で思い付いたんですけど、徳島の阿波おどりがもともとは場所ないんですね。今はそれぞれの踊りのチーム、連（れん）がやって来て、大きな観覧席があってそこで見るという、そういう場所が 4 カ所しつらえてありますけども、もともとはそれが無くて、町中を流して歩くだけだったんですね。ねぶたの祭りの話聞いてて、そういうものって結構あったんじゃないかなと思いました。すると特別の場所がない代わりに町中が祭りの場所になる。通りを練って歩きますからね。それも決まった場所じゃなくて、あの通りがいいやとかあっちに入ろうとか勢いに乗って練り歩くわけだから、町中が盛り上がる。そういう祭りっていうのはあるんじゃないかなと思いました。

【発言　鳴海邦碩】　阿波おどりの原点は盆踊そうですね。ネプタも、お盆や七夕と関係があるといわれます。ですが、特定のお寺や神社とは結びついていない。その点から、ネプタを紹介する時、「ネブタには神様がいない」といっています。特定の神社が関係ないので。もちろん、太古の神様は関係ありますが。

起源的にはネプタはお盆の性質を持っていると言われますが、今、実際に、「仏教」と関係づけて考える人は、ほとんどいないと思います。行事として「盆踊」と関係づけている地域はあります。

青森県の津軽地方には、「虫送り」とか「お山参詣」とか、「原始的イメージ」のある祭りが残っていて、廃れることなく続いていて面白いです。神社に関連付けられる祭りもありますが、いわゆる「神道」「お社としての神社」とは相当かけ離れたイメージです。

【回答　大平和弘】私もあんまり思ってもみなくって。どうしても伝統的祭りっていうと、私が調査事例に挙げてるような場所を伴ってるものと認識してきたんですけれども、いわゆる祝祭と呼ばれるような町全体で、カーニバルですよね。海外でもあると思うんですけど。そういったタイプのものも歴史もあるし、ひも解いていくと、そういった所がにぎわってる場所がどこなのかっていうのは、また新たな文化的空間の創出みたいなところではすごく重要なのかもしれませんし、またそういうのも時代によって変わってきたりするっていうのも、なんか都市的だなというようことで、また別な興味が湧いてきましたね。

【発言　中村伸之】お祭りと狩猟社会型のお祭りってあるのかなと思ったんですけども、最初、アイヌのお祭りっていうのは明らかに狩猟ですよね。クマがもう一度たくさん捕れるように、いい思いをしてクマの子どもを殺しちゃうというやつですよね。あと農耕型っていうのは、典型的なのは桜ですよね。山の神が桜に宿って、それを田の神に返還すると。それっていうのは非常に土地に結び付いてますよね。ちょっとそういう、簡単に図式化できないけど、土地への執着とか農耕とか狩猟。狩猟型っていうのは、ノマドだからいろいろ動きますよね。なんかそういうパターンがもし祭りの源流にあるとかないとかね。魚を取るっていうのも狩猟型ですよね。そういう見方も上にかぶせていったら面白いかなという気がいたしました。どうも、思い付きで失礼しました。

【発言　岡絵理子】チャットに阿波おどりの桟敷

の話の書き込みがあります。それで思い出したのですが、桟敷といったら、上田篤先生がお祭り広場を設計するときに参考にしたという、小豆島の池田の桟敷がありますね。あれは祭りをする場所です。小豆島の南の海岸沿いの海に面した所に広場があって、それに向かって段々の桟敷があるんです。お祭りの日の何日か前になると、皆さん、自分の桟敷ところにさらに屋根を付けたりして、陣取るっていうふうなことをされる所があるんです。それを参考にされたとおっしゃられていました。

他にも質問はございませんでしょうか？

【発言　鳴海邦碩】祭りというと、武士は足を引っ張る方で、もっぱら町人のものだ、というイメージがありますが、お祭りが好きなお武家さんもいたようです。

江戸の日枝神社は江戸の開発以前からあった神社で、その祭礼である山王祭りには保護が加えられたといわれるし、神田祭は町人の祭りのイメージだが、徳川家縁起の祭になっている。全国の多くの藩でも、祭りが経済的にも民政的にも重視されたのではないかと思う。実際、津軽の殿さまは祭りが好きで、祭りを支援したようだし、ネプタそのものが、津軽公が、京都でやったデモンストレーションが発祥とも言われている。

もちろん倹約、質実剛健をうたって、祭りを規制した御殿様もいた可能性もある。

それから、ご存じのように明治になってからの廃仏毀釈も祭りに影響を与えた。規制だけではなく、日本人の悪い癖で自粛された祭りもあったそうだ。京都で大文字をやめたり、地蔵盆が一時中止したのもそのたぐいである。

そんなことにいろいろ頭を巡らしてみて、お祭りのための独特の空間が城下町に生まれるだろうかということを考えると、なかなか難しそうだなという気がします。社寺は位置づけられる。他方で、商売の町にはできるのではないか。特に港町には生まれそうな気がする。それでは街道町ではどうだろうか。

集落の中心は村はずれにある、という民俗学的な空間論がある。祭りの文化的空間論を語るにはこれまでとは違うアプローチが必要ではないかと思いました。

町人自身が祭りの空間をつくるというのは、よっぽど江戸時代には勇気が要ったんじゃないかなと思います。力のある職人集団とか船乗りとか、そうした人びとは勝手にやったかもしれませんが、商売をしている人たちには無理だったのではないか。だから、神社に頼るしかない。

いろいろ皆さんのお話聞きながら祭り空間について想像を膨らませてみています。

【発言（チャット書き込み）　松本浩和】都市の夏祭りは人口集住の結果、必然的に起こってくる疫病への恐れから生まれていて。祇園祭なんかもそうですね。先生のねぶたもそうですね。春秋の農耕開始と収穫の喜びを祝い祈る農業との関係のある祭りとは性格が違うということを米山俊直先生がご指摘されていましたと。立地や祭りの季節との関係もこの辺りから読み解けるかもしれません。

【発言　岡絵理子】大平さんの祭りの分布図ですが、祭りが行われる時期によって分布図をつくるとなんかまた違うことが見えるかなと思いました。祭りについてヒアリングしていた時に言われたのですけども、祭りの空間も祭りの道具もいろいろと変わってきているけど、一番変わったのが男の体力だって言われました。漁師さんとか農耕をやっていた人たちってものすごく体力があったので、それが祭りを可能にしたのに、そこが一番追い付かなくって、昔、何人で持っていたみこしが今持てないとか、そういうことが起こっているという話を伺いました。祭りの存続はなかなか難しいなと思うところですね。

もうそろそろ終わりたいと思いますが、大平先生、最後に、きょうのお話も受けまして、こんなことをこれからやりたいなとか、それから、皆さんからこんな情報を収集したいなということがありましたら、よろしくお願いします。

【回答　大平和弘】ありがとうございます。私自身も祭りの研究をそこまで本腰入れてといいますか、なかなかできていなかったこともあって、皆さんからのご指摘はごもっともで、いろんな着目点があるのかなと思って、すごく参考にさせていただきたいことがありました。ただ、引き続き科研費というお金を取って祭りの研究をやることになっているんですが、コロナの状況で全く進まない状況にあります。ただ、逆にコロナの状況だからこそ復活してるようなお祭りもあったりして、先ほど、ちょっと私自身行けてないんですが、家

島天神のいわゆる疫病払いの儀式的なものなんかは、この機に再生してみようと。いろんな記録をたどって、住民のかたがたで見よう見まねでやってみようじゃないかというような所も出てきたりしてます。そんなふうな再生していくようなお祭りなんかも着目していくと、全然違った新しい、いろんなコミュニティーとの関わりだとか、あるいは空間との関わりなんかも含めて見えてくるんじゃないかなという、ちょっと今現在コロナ禍においても着目できるような要素かなと思　ったりしています。もし皆さんにもご知見があれば情報を伺いたいなと思っております。ありがとうございます。

【発言　岡絵理子】どうもありがとうございました。ということで、きょう、今回の第　4　回のセミナーは終了いたします。